

社会化と教育アスピレーション

三 輪 哲*
苦米地 なつ帆**

本稿の目的は、社会学や教育社会学において重要な研究対象である教育アスピレーションが、親子の会話という「社会化」の影響を受けて高まるのかを再検討することである。そのため本稿では、傾向スコア法を用いて、交絡要因をより厳格に統制した後でも「社会化」効果の証拠が見られるかを検討した。分析の結果、親子の会話頻度は子どもの教育アスピレーションや成績に影響を与えていないことが明らかとなった。他方、出身階層は教育アスピレーションに影響を与えており、教育達成をめぐる個人の意識は、出身階層による制約を免れてはいないことも明らかとなった。教育アスピレーションに対して、会話による社会化効果がないならば、高校生に対して親から積極的に働きかけることは必ずしも有効ではない。因果的に効果があり、かつ親や教師から操作可能な要因が見つからない限り、意図的に高校生の進学意欲を高めることには成功しえないと考えられる。

キーワード：社会化、教育アスピレーション、傾向スコア

1 はじめに

社会学において、アスピレーションとは、「社会的諸資源を具体的目標とした達成要求」(中山・小島 1979)とされる。教育アスピレーションはその下位類型の一つにあたり、どの程度までの教育達成をしたいかを示すものである。個人の教育達成に対する希望や意欲と言い換えてもほぼ同義といえよう。教育アスピレーションという概念が社会的に重要なのは、それが地位達成の過程における重要な媒介変数となるからである。すなわち、出身階層や周囲の他者の影響を受けて教育アスピレーションが形成され、アスピレーションの高低は実際の教育達成へと影響する。ひいては、教育が職業達成を規定するというように、ライフコースを通しての地位達成過程の中で、教育アスピレーションが階層的地位の再生産へと寄与する側面があるがゆえに、社会学や教育社会学の中では教育アスピレーションが重要な研究対象として位置づけられてきた(片瀬 2005; Sewell et al. 1970)。

教育アスピレーションはあくまで個人の希望や意欲を表現するものであるから、本来はその個人の自由な選択によって決定されるはずである。しかし実際には、個人の自由な意思だけではなく、

*教育学研究科 准教授
**教育学研究科 博士課程前期

様々な要因によって教育アスピレーションが規定されている。なかでも検討されるべきなのは、親子の会話の効果であろう。親子の会話頻度が教育アスピレーションへと直接に影響すると主張する先行研究はさまざま存在する。Lauglo (2011)によると、親子間で政治に関する会話をする頻度が高いほど、子どもの教育アスピレーションは高まるとされている。また、日本では鳥(2008)が、親子で(子どもの)将来のことにについてよく話をしているほど、教育アスピレーションが高まるとしている。これらが説くことは、よく会話をする親子ほど、子どもの教育アスピレーションは高くなるということである。それを社会的に解釈するならば、「社会化」効果の証左として解釈される。

そうした「社会化」効果は、真の因果効果を示すものだろうか。この素朴な疑問が本稿の出発点である。Lauglo (2011)で採用されたアプローチは、重回帰分析などの従来型の統計手法であった。しかしながら、それは交絡要因の統制に難があり、因果効果を正しく推定できないことがしばしばあると、近年の統計科学の立場から指摘されている(星野 2009)。

そこで本稿では、社会科学における因果分析の先端的手法たる傾向スコア法を用いて、「社会化」効果の再検討に挑む。傾向スコアによる重み付けをして交絡要因をより厳格に統制した後も、「社会化」効果の証拠が見出されるか否かが、分析解釈上の焦点となる。

2 先行研究と課題

(1) 先行研究の知見

教育アスピレーション研究の多くは、アメリカのウィスコンシン・モデル (Sewell et al. 1970) に示されるような「重要な他者」(家族、とくに親)による社会化の影響と、親の社会経済的地位などの、家族の構造的な要因の影響を検証している。日本においては、性別や学業成績など個人の性質に関する要因や出身階層に関する要因、そして家庭の子どもの数など家族の構造的な要因などが検討されてきた(片瀬 2005)。このことから明らかなように、教育アスピレーションは、個人の性質のみで決まるものではなく、家族による影響を受けて決定づけられるものとしてとらえられてきた。また、家族は、教育アスピレーション形成において強い影響力を持つことが結果として確認されてきた(片瀬 2005)。しかし、親による社会化に重きを置いた研究のほとんどは親の教育期待を扱ったものであり、具体的な社会化の手段に言及したものは少ない。

一方で、家族の社会化の影響に注目した研究の中には、親子間の会話による社会化と教育アスピレーションの関係を検討した研究もいくつかある。これらは一貫して、「会話は教育アスピレーションに影響を与えている」という結論を導出している。鳥(2008)は、子どもの進学希望とその規定要因についての研究を行っており、子どもの将来に対する親の関心を表す指標として、親子間の会話(子どもの将来のことをよく話すか)を用いている。分析の結果、子どもの将来に対する親の関心は、子どもの進学希望に影響を与えるということが明らかとなった。同時に、子どもの将来に対する親の関心は、親の社会経済的地位や子どもの成績および性別とは関連を持たないということも示している。このことから、会話は出身階層や子どもの学力等の状況とは別に、それ自体が子どもの進学希望に影響を与えていると考えることができる。また、宮本(2005)は、教育・就職に関するアドバ

イスを子どもにすることや、それらについて子どもと話し合うことがないような親の放任や無関心が、子どもの学業に対する意欲を低くするという事例を挙げている。そして、そのような親のもとで育った子どもたちは、学業に対する意欲や動機づけが形成されにくいのではないかと指摘している。いずれも親子のコミュニケーションの1つである「会話」が、子どもの教育アスピレーションに対して重要な一要因であるということを示唆している。

類似した結果は、国外の研究でも得られている。Lauglo (2011)は、政治的社会化の文脈において、親子間の会話頻度と子どもの成績および教育アスピレーションとの関係を検討した。それによると、親子間の会話頻度と子どもの成績および教育アスピレーションには関連があり、政治について子どもと話し合う頻度が高いほど、子どもの成績が高いことや、子どもの進学希望が高いことが明らかとなった。また、それらの結果は、両親の学歴や父親の職業、家庭の文化資本の量を統制した状態でも得られている。この結果からも、親子の会話がその他の要因とは独立したものとして、子どもの成績や教育アスピレーションに影響を持っていることがわかる。

以上のように、先行研究における結果は一貫している。特に重要なのは、本の冊数などで表される文化資本や父親の職業や学歴といった階層的要因を統制しても、親子間の会話が影響を持っているということである。教育アスピレーションは、家族の構造的な要因のみならず、会話によっても形成されていると考えられる。

(2) 検討すべき課題

教育アスピレーションに対する親子間の会話頻度の効果は、確かに先行研究では一貫してみられていた。しかしながら、それらの知見が重回帰分析を中心とした、従来型の多変量解析法で得られていた点には注意を要する。なぜならば、それは、従属変数と共変量との関係を正しくモデル化できているときに限り、バイアスのない因果効果が推定できるものであるという限界を有するからである(星野 2009)。

先行研究から得られた知見をふまえて、本稿では親子の会話頻度が他の要因とは独立して子どもの教育アスピレーションに影響を与えているかどうかを再検討する。ここで重要なのは、それをできる限りバイアスを少なくする方法(傾向スコアを用いた重み付け法)で検証することである。先行研究の結果が真であれば、傾向スコアを用いて分析した場合でも、会話頻度は教育アスピレーションに対して統計的に有意に影響を持つはずである。傾向スコアを用いた結果、会話の影響が見られなかった場合は、会話頻度が高いと教育アスピレーションが高くなるというのは見せかけの効果であり、会話頻度それ自体は成績や教育アスピレーションに影響を与えてはいないということを意味する。

3 データと変数

(1) データ

本稿で用いるデータは、東北大学教育文化研究会が企画および実施した「教育と社会に対する高

校生の意識」調査の、第5次・第6次データである。この調査は、仙台圏の高校に通う高校2年生とその保護者を母集団として、層化三段抽出法によって抽出された個人とその保護者を対象に、第5次調査は2003年、第6次調査は2007年に自記式集合調査法(生徒回答)および自記式配票調査法(保護者回答)で実施された。第5次調査の標本数は1,280、第6次調査の標本数は1,551であるのに対し、回収票数は第5次が1,113(回収率87.0%)、第6次が1,231(回収率79.4%)であった。実施年は異なるが、第5次と第6次には同じ質問項目が含まれていたため、2つのデータを合併して分析に用いている。欠損データを除いた有効ケース数は、 $N = 1,257$ である。

(2) 変数

次に、分析に用いた変数について説明する。本分析では、Lauglo (2011) で用いられていた変数に倣って変数の操作化を行った。各変数の記述統計量は、表1を参照されたい。

「会話頻度」は、「親子の会話が多いと思うか」(そう思う・ややそう思う・あまりそう思わない・そう思わないの4件法)という変数を、「そう思う・ややそう思う」は「会話している(=1)」に、「あまりそう思わない」「そう思わない」は「会話していない(=0)」にそれぞれ変換したダミー変数である¹⁾。

分析1で従属変数、分析2では独立変数となる「子どもの成績」は、クラス内での成績自己評価(10段階評価)から、標準化得点を求めて使用している。また、「子どもの教育アスピレーション」は、生徒本人が大学への進学を希望している場合を1、それ以外を0とするダミー変数とした。

続いて、独立変数となる変数について説明する。「父親職業」は、「従業上の地位」、「従業先規模」、「職業」の3変数を組み合わせ、SSMの職業8分類に倣って「中小企業ブルーカラー」「大企業ブルーカラー」「自営業ブルーカラー」「農林水産業」「中小企業ホワイトカラー」「大企業ホワイトカラー」「自営業ホワイトカラー」「専門職」を割り当て、ダミー変数とした。「父親学歴」と「母親学歴」は、「中卒以下」「高校・短大・専門卒」「大卒以上」を意味するダミー変数とした。「本の冊数」は、「10冊未満」「10～19冊」「20～49冊」「50～99冊」「100～199冊」「200冊以上」とし、それぞれに当てはまる場合を1、それ以外を0とするダミー変数とした。「女性ダミー」は、女性を1、男性を0とする変数である。「両親と同居ダミー」は、父親と母親の両方と同居していると回答している人を1、それ以外を0とした。「進学校ダミー」は、進学校を1、それ以外を0とした。

4 統計技法と分析モデル

(1) 統計技法

本稿で鍵となる統計手法は、傾向スコア法²⁾である。傾向スコアとは、ローゼンバウムとルービンにより提唱された概念である(Rosenbaum and Rubin 1983)。交絡要因の統制をマッチングや層別でおこなうための、複数の共変量の情報が集約されたただ1つの変数をつくる、という発想に基づいている。そして、その集約された変数のことを、傾向スコアと呼ぶ(星野 2009)。

本稿の分析枠組みで、考え方を例示しよう。独立変数とする会話頻度について、それが高いグルー

プと、低いグループがあるとする。問題の焦点は、会話頻度が高くなることで、教育アスピレーションが高くなるかどうか、である。それならば先ほどの2つのグループを比較すればよい、と思うかもしれないが、事態はそれほど単純ではない。会話頻度の高いグループに属している人が、もし会話頻度が低かったらどのような結果になるのかは、不明なのである。同様に、会話頻度の低いグループに属する人が、もし会話頻度が高かったらどうなるかも、不明である。そのように、両グループとも事実とは反する潜在的な結果がありうるがために、観察された調査結果は、因果的効果の推定に関して偏りをもっている。それを調整するには、会話頻度と教育アスピレーションとのあいだの関連に交絡するさまざまな要因の影響を除去する必要がある。交絡要因の除去によって、両グループを技術的に等質化すると言い換えてもよい。そうした交絡要因の除去ないし両グループの等質化を実現する方法が、傾向スコア法なのである。

本稿では、通常の線形回帰分析に加え、傾向スコアによる重み付け法を用いた回帰分析をおこなう。傾向スコアを用いるのは、傾向スコアを用いて因果効果を推定することによって、通常の回帰分析に比べて、より厳格に因果関係を推定可能になっている Average Treatment Effect が求められるためである。

傾向スコアは、次のような方法で求め、使用する。まず、傾向スコアを求めたい変数を、その他の共変量で説明するモデルをつくり、ロジスティック回帰分析を行う。本稿では、「会話頻度」を、両親の学歴、性別など、表1に示す共変量で説明するロジスティック回帰モデルを用いた。その結果から推定される予測確率(傾向スコア)を計算した。そして、その傾向スコアの逆数による重み付け(Inverse Probability Weighting)をおこなう。

(2) 分析モデル

本稿の分析枠組みは、Lauglo (2011)を参考にしてている。

まず、「親子の会話頻度が高いほど、子どもの成績が向上する」のかについては、次の4つのモデルを回帰分析によって比較し検討した。モデル A1は、従属変数を子どもの成績(標準化したもの)、独立変数を会話頻度とする。モデル A2は、従属変数はそのまま、独立変数には会話頻度のほかに両親の学歴、本の冊数、父親の職業、性別(女性ダミー)、両親と同居ダミー、進学校ダミーを投入する。モデル A3は、傾向スコアの逆数で重み付けたうえで A1 同様の分析をした。モデル A4では A3の条件に加え、モデル A2で用いたその他の変数を投入した。

「親子の会話頻度が高いほど、子どもの進学アスピレーションが高くなる」のかを検証するために、回帰分析によって4つのモデルを比較し検討する。モデル B1では、従属変数を子どもの教育アスピレーション³⁾、独立変数を会話頻度とする。次に、モデル B2では従属変数はそのまま、独立変数にはモデル A2で用いたものに成績を加える。そして B3では傾向スコアの逆数で重み付けて B1 同様の分析をおこなった。モデル B4では B3に加え、モデル B2で用いたその他の変数を投入した。

表1 使用した変数の記述統計量

	最大値	最小値	平均値	標準偏差
会話頻度	1	0	0.78	0.41
子どもの成績	1.80	-1.73	0.04	1.00
子どもの教育アスピレーション	1	0	0.56	0.50
【父親の学歴】				
中卒以下	1	0	0.03	0.16
高校・専門・短大卒	1	0	0.55	0.50
大卒以上	1	0	0.43	0.49
【母親の学歴】				
中卒以下	1	0	0.01	0.10
高校・専門・短大卒	1	0	0.85	0.36
大卒以上	1	0	0.14	0.35
【本の冊数】				
10冊未満	1	0	0.11	0.31
10～19冊	1	0	0.10	0.30
20～49冊	1	0	0.22	0.42
50～99冊	1	0	0.20	0.40
100～199冊	1	0	0.17	0.37
200冊以上	1	0	0.20	0.40
【父親の職業】				
中小企業ブルーカラー	1	0	0.09	0.28
大企業ブルーカラー	1	0	0.05	0.22
自営業ブルーカラー	1	0	0.03	0.17
農林水産業	1	0	0.01	0.09
中小企業ホワイトカラー	1	0	0.38	0.48
大企業ホワイトカラー	1	0	0.13	0.34
自営業ホワイトカラー	1	0	0.03	0.17
専門職	1	0	0.29	0.45
女性ダミー	1	0	0.45	0.50
進学校ダミー	1	0	0.31	0.46
両親と同居ダミー	1	0	0.99	0.08

N=1,257

5 結果

(1) 会話頻度が子どもの成績に与える影響の検討

さてこれより、会話頻度と成績との間の因果効果を推定した結果をみていこう。表2のモデル A1 とモデル A2 は、傾向スコアによる重み付けを用いずに線形回帰分析を行った結果である。モデル A1 では、独立変数の「会話頻度」の回帰係数は0.236で、0.1%水準で統計的に有意であることがわかる。また、モデル A2 でも「会話頻度」の係数は0.244となり、同じく0.1%水準で統計的に有意である。なお、モデル A2 では他の独立変数も投入しているが、いずれも統計的には有意ではなかった⁴⁾。以上、モデル A1 と A2 の結果からは、親子の会話頻度が高いほど子どもの成績が高くなるということが裏付けられる。すなわちこの証拠からは、学業成績に対する社会化効果があると一言えそうである。

続いて、表2のモデル A3 とモデル A4 は、傾向スコアを算出して重み付けをしたうえで同様の分析を行った結果である。モデル A3 では、「会話頻度」の係数は0.018で、統計的に有意ではなかった。また、モデル A4 でも「会話頻度」の係数は0.017であり、こちらも統計的に有意ではない。しかも、両者ともに、対応する重み付け前の結果⁵⁾と比べると、関連のほとんどすべてが消えているといえるほどに、得られた係数の値が変わった。したがって、傾向スコアの逆数による重み付け法を用いた場合「会話頻度」は「成績」に影響を与えていないということが明らかとなった。これらの結果を総合的に判断すると、モデル A1 および A2 でみられた社会化効果は、あくまで交絡要因がもたらした擬似的なものであり、因果的効果は存在しないと受けとめなければならない。

ここで1点強調しておくべきことは、この結果は、傾向スコア法を用いたがゆえに得られたものであるということだ。重回帰分析や共分散分析などのモデルでも、共変量の統制は設定したモデルの範囲内で可能である。今回も、モデル A2 は、重回帰分析による統制を試みたものといえる。しかしそれでは会話頻度の回帰係数はほとんど違いがもたらされなかったので、交絡要因の統制はできていなかったといわざるをえない。傾向スコア法により、より確かな因果推論をおこなったからこそ、上記の結果が得られたといえる。

以上のモデル A1 から A4 の結果より、会話は子どもの成績に影響を与えていないということが明らかとなった。モデル A1 や A2 のような通常の単回帰分析や重回帰分析では、一見、会話頻度は影響を与えているように見えるが、それは見せかけの効果に過ぎない。

(2) 会話頻度が子どもの教育アスピレーションに与える影響の検討

続いて、会話頻度と教育アスピレーションとの間の因果効果を推定した。表3のモデル B1 とモデル B2 は傾向スコアを用いずに回帰分析を行った結果であり、モデル B3 と B4 は傾向スコアを用いて回帰分析を行った結果である。モデル B1 では、独立変数の会話頻度の非標準化回帰係数は0.107で、1%水準で統計的に有意である。また、モデル B2 の会話頻度の回帰係数は、0.051と推定された。それは10%水準ならば、統計的に有意である。こちらの結果は、重回帰分析でもある程度交絡要因の効果が統制され、会話頻度の回帰係数はほぼ半分にまで減少した。だが、いずれの場合も会話頻

度の係数が統計的有意な正の値を示していることから、親子の会話頻度が高いほど、子どもの教育アスピレーションも高くなるといえる。

続いて、表3のモデル B3とモデル B4は、傾向スコアによる重み付けを行った回帰分析の結果である。モデル B3では、会話頻度の非標準化係数は0.039で、モデル B1の係数0.107と比較するとその値の違いは明らかである。また、モデル B3の回帰係数は、統計的にも有意ではない。同様にモデル B4でも、会話頻度の非標準化係数は0.042であり、統計的に有意ではない。傾向スコアを用いた分析で検討したところ、会話頻度は教育アスピレーションに影響を及ぼさないということが明らかとなった。

以上の分析結果をまとめると、最も重要なのは、会話は子どもの教育アスピレーションに影響を与えていないということである。これまで行われてきた傾向スコアを用いない重回帰分析の結果のみを見ると、確かに会話頻度は統計的有意に教育アスピレーションに影響を与えていた。しかし、傾向スコアを用いて交絡要因を取り除いてみると、結果は全く変わったものになり、統計的にも有意ではなくなった。

さらに、会話頻度と他の共変量との関連を除いたモデル B4と、そうしなかったモデル B2とのあいだで、その他の変数の効果はほとんど変わらず残ったままであった。このことから、会話頻度が子どもの教育アスピレーションに影響を与えないことに加えて、その他の変数は会話頻度とはまったく独立に教育アスピレーションへと影響していると考えられる。他の変数の関連を、検定結果と符号の向きに注目してより詳しく見てみると、まず子どもの成績や進学校ダミーは正の方向に統計的有意な影響を与えていた。成績が高いほど、また進学校はそれ以外よりも教育アスピレーションが高い傾向がみられるということである。それから父親の学歴と母親の学歴が高くなるのに伴い、教育アスピレーションが高くなる傾向もみられた。さらに、父親の職業については、ブルーカラーよりもホワイトカラーのほうが高い教育アスピレーションを抱きがちであり、とりわけ大企業ホワイトカラーは最も高くなるようであった。これらの知見は、教育アスピレーションに対する出身階層背景の影響力を再確認するものといえる。たとえ成績が同程度であったとしても、階層による位階的秩序の中での地位次第では、アスピレーションは変わりうるのだ。すなわち出身階層という構造的要因は、今なお進学意欲を制約する隠れた要因であることが、ここで顕わになったのである。

表2 高校生のクラス内成績にかんする線形回帰分析の結果(係数は非標準化回帰係数)

	モデル A1	モデル A2	モデル A3	モデル A4
定数項	-0.145*	-0.616	0.022	-0.589
会話頻度	0.236***	0.244***	0.018	0.017
父親学歴(ref: 中卒以下)				
父親高校・専門・短大卒		-0.115		-0.057
父親大卒以上		0.002		0.062
母親学歴(ref: 中卒以下)				
母親高校・専門・短大卒		0.086		0.123
母親大卒以上		0.170		0.218
本の冊数(ref: 10冊未満)				
10～19冊		0.117		0.107
20～49冊		-0.077		-0.085
50～99冊		0.030		0.052
100～199冊		-0.042		-0.041
父親職業				
(ref: 中小企業ブルーカラー)				
大企業ブルーカラー		0.152		0.192
自営業ブルーカラー		0.053		0.070
農林水産業		-0.121		-0.105
中小企業ホワイトカラー		0.060		0.056
大企業ホワイトカラー		-0.174		-0.171
自営業ホワイトカラー		-0.263		-0.281
専門職		-0.051		-0.039
女性ダミー		0.034		0.049
両親同居ダミー		0.468		0.506
進学校ダミー		-0.099		-0.096
R ²	0.009	0.028	0.000	0.019
調整済み R ²	0.009	0.014	0.000	0.005
N	1,257	1,257	1,257	1,257

†; $p < .1$ *; $p < .05$ **; $p < .01$ ***; $p < .001$

表3 高校生の教育アスピレーションにかんする線形回帰分析の結果(係数は非標準化回帰係数)

	モデル B1	モデル B2	モデル B3	モデル B4
定数項	0.477***	-0.035	0.535***	-0.021
会話頻度	0.107**	0.051 [†]	0.039	0.042
成績		0.067***		0.067***
父親学歴 (ref: 中卒以下)				
父親高校・専門・短大卒		0.162*		0.166*
父親大卒以上		0.234**		0.244**
母親学歴 (ref: 中卒以下)				
母親高校・専門・短大卒		0.172		0.166*
母親大卒以上		0.243*		0.244**
本の冊数 (ref: 10冊未満)				
10～19冊		-0.062		-0.056
20～49冊		-0.019		-0.010
50～99冊		0.024		0.028
100～199冊		0.041		0.040
父親職業 (ref: 中小企業ブルーカラー)				
大企業ブルーカラー		-0.106 [†]		-0.114 [†]
自営業ブルーカラー		0.032		0.032
農林水産業		0.096		0.112
中小企業ホワイトカラー		0.094*		0.094*
大企業ホワイトカラー		0.168**		0.169**
自営業ホワイトカラー		-0.025		-0.018
専門職		0.104*		0.104*
女性ダミー		-0.018		-0.019
両親同居ダミー		-0.059		-0.074
進学校ダミー		0.507***		0.502***
R ²	0.008	0.376	0.001	0.375
調整済み R ²	0.007	0.366	0.000	0.365
N	1,257	1,257	1,257	1,257

[†]; $p < .1$ *; $p < .05$ **; $p < .01$ ***; $p < .001$

6 結論

本稿の分析から、会話頻度は子どもの教育アスピレーションや成績に影響を与えていないということが明らかとなった。これは先行研究とは大きく異なる結果である。傾向スコアを使用しない回帰分析において、会話頻度が高いほど教育アスピレーションや成績が向上するという結果が出ているのは、会話頻度以外の要因との交絡によって、会話頻度が効果を持つように見えていたのだと考えられる。

会話の頻度が子どもの教育アスピレーションに影響を与えていないということは、親子の会話によるコミュニケーションは、子どもの教育アスピレーションを規定する要因にはならない、ということの意味している。一方、出身階層は教育アスピレーションに影響を与えているということが明らかとなり、やはり出身家庭の置かれている階層構造的要因が教育アスピレーションを規定する要因として強い影響力を持っているのだと考えられる。また、子ども自身の成績が高いと教育アスピレーションも高くなるという関係から、子どもは自分の成績をもとに、教育アスピレーションを自己調整していることがうかがえる。さらに、進学校に通っている子どもの方が、高い教育アスピレーションを持っていることが分析から明らかとなった。これは、中西(2000)が主張するように、高等学校には明白な学校ランクが存在していて、それによって高等教育へのアクセスが制限されている現状をあらわす結果である。

それらをふまえると、教育アスピレーションを形成するにあたって重要なのは、親による社会化をはじめとする社会心理学的な要因ではなく、出身階層などの構造的要因と、個人がどのような学校に在籍し、どのような成績なのかという個人の要因であるといえる。子どもは、教育達成を獲得する前から既に、一方では自身の現状を把握しつつ、もう一方で自分自身ではどうすることもできない構造的要因の影響を受けてそのアスピレーションを形成している。教育達成をめぐる個人の意識も、出身階層による制約を免れてはいないことが明らかにされた。

以上で、教育アスピレーションに対しては会話による社会化効果がないことが実証されたわけである。これが何を含意するか、議論しておこう。まず言えることは、高校生に対して、親から積極的な働きかけをすることは有効とは思えないということである。因果的效果が否定されたので、意図的に会話を増やしたところで、子どもの進学意欲が高まるわけではないし、成績が上がるということも期待できない。因果的に効果があり、なおかつ、親や教師などから操作可能な要因が見つからない限りは、意図的に高校生の進学意欲を高めることには成功しえないものと思われる。

最後に本稿の限界について述べておきたい。本稿では、分析に「会話頻度」という変数を用いたが、この測定にはいくつかの難点がある。まずこの変数では、内容が特定されていないため、「勉強に関する会話」や「進学に関する会話」等、会話の内容を具体的にした場合に、本稿同様の結論が得られるとは限らない。また、今回使用した「教育と社会に対する高校生の意識」調査では、生徒だけではなくその保護者にも調査を行っているが、本稿では生徒本人の成績や教育アスピレーションについてのみ検討にとどまっている。データの特徴を上手く活かし、保護者の教育期待などを加味した分析を行うことも今後の課題となろう。さらには本稿では傾向スコアを用いた分析を行ったが、

傾向スコアを用いる技術的制約はサンプルサイズの確保である。会話頻度の高い群と低い群とのあいだを等質にするためには、十分に大きなサンプルサイズのデータが必要であるとされる。だが今回のサンプルサイズは決して小さくはないものの、やや心もとないサイズであることも否めない。これら限界を乗り越えた再検証を繰り返し、社会化効果の精緻な実証を進めることが重要であろう。

【註】

- 1) 4件で得られた情報を2件にするのは情報の損失となるが、傾向スコアを使うためにあえてカテゴリー合併した。3件以上のカテゴリーに対して傾向スコアを求めるのは、さまざまな技術的困難が生じることが知られるゆえである。
- 2) 傾向スコア法の詳細については、星野(2009)や Guo and Fraser (2009)などの成書を参照のこと。
- 3) 教育アスピレーションは、四年制大学以上か否かをあらわすダミー変数であり、それを従属変数にする Linear Probability Model により分析した。ダミーの従属変数ならば、ロジットまたはプロビットモデルでの推定が今や標準的だが、傾向スコア法を用いる際には、これらの非線形モデルは不都合が生じるので、それを避けるために比率の差を直接に分析対象とする Linear Probability Model を採用した。
- 4) これは、今回の分析で用いた学業成績が、「高校のクラス内の相対的位置」であることも一因であろう。なぜなら、サンプルに含まれる仙台圏の高校も、中学校段階までの学力で層化されており、学校間の平均的学力差がデータに反映されていないからである。
- 5) モデル A1 に傾向スコアの重み付けをしたものが A3、モデル A2 に重み付けをしたものが A4 という対応関係がある。表3に示したモデル B1 ~ B4 ついても同様。

【引用文献】

- Guo, S. and M. W. Fraser (2009) *Propensity Score Analysis: Statistical Methods and Applications*, Sage.
- 星野崇宏(2009)『調査観察データの統計科学—因果推論・選択バイアス・データ融合』岩波書店。
- 片瀬一男(2005)『夢の行方—高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会。
- Lauglo, J. (2011) "Political socialization in the family and young people's educational achievement and ambition," *British Journal of Sociology of Education* 32(1): 53-74.
- 宮本みち子(2005)「家庭環境から見る」小杉礼子編『フリーターとニート』勁草書房: 145-197.
- 中西祐子(2000)「学校ランクと社会移動—トーナメント型社会移動規範が隠すもの」近藤博之編『日本の階層システム3 戦後日本の教育社会』東京大学出版会: 37-56.
- 中山慶子・小島秀夫(1979)「教育アスピレーションと職業アスピレーション」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会: 293-328.
- Rosenbaum, P. R. and D. B. Rubin (1983) "The Central Role of the Propensity Score in Observational Studies for Causal Effects," *Biometrika*, 70: 41-55.
- Sewell, W. H., A. O. Haller and G. W. Ohlendorf (1970) "The Educational and Early Occupational Attainment Process: Replication and Revision," *American Sociological Review* 35(6): 1014-1027.
- 島直子(2008)「中学生の進学希望とその規定要因における性差」『上智短期大学紀要』28: 95-105.

The Effect of Socialization on Educational Aspiration among Japanese High School Students

Satoshi MIWA

(Associate Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

Natsuho TOMABECHI

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

The purpose of this paper is to reexamine the effect of socialization by the conversation between parents and child on child's educational aspiration which is an important research subject in sociology. In this paper, we adopt propensity score weighting to control various confounding factors. As a result, the frequency of the conversation between parents and child does not have an impact on child's educational aspiration and academic performance. On the other hand, parental level of education and other socio-economic status have the effect on child's educational aspiration. Therefore, it is revealed that child's educational aspiration is still restricted by the socio-economic status despite that is an individual matter. Given the lack of socialization effect by the conversation between parents and child, it is not effective that parents encourage the child to enhance their educational aspiration and academic performance. We conclude that it is difficult for parents and teachers to enhance child's motivation for college enrollment unless we find the factor that has direct causal effect and is operational by parents and teachers.

Keywords : Socialization, Educational Aspiration, Propensity Score

